

逆求人セミナーレポート

哲学・思想専攻 5年次 今井信治

10月15日(木)筑波大学就職課企画による「逆求人セミナー」が行われた。このセミナーは昨年まで理系大学院生を対象としていたが、今年度より文系院生も参加が募られたため、私も応募した次第である。もちろん、事前資料に名を連ねる参加企業名に惹かれるところがあったのは言うまでもない。ただし、つまりは文系対象としては今年が初めての試みであるため、前例を範にすることもできない。そのためか、50人弱いる参加学生のうち文系院生は2割程度の応募率であった。

しかしながら、企業側の「文系を視野に入れた求人を」という要望があったと事前に知らされていたように、必ずしもセミナー場内の雰囲気は理系一色であったわけではない。従来、企業側がプレゼンを行うなどして催される説明会に対し、本セミナーが「逆求人」と銘打っていることからわかるように、学生側が企業に対して「自身の研究と社会性」をPRするのがこの「逆求人セミナー」である。「自身の研究」がそのまま研究職の道へと繋がる理系と比して、文系が専門性と社会的意義を両立させながらアピールすることには困難が付きまとうが、それでも文系学問が果たす社会的責任を考える際、こうしたプレゼンテーションは必要不可欠な試みであろう。

こうした前例のない試みに乗り出すこと、加えて私自身の所属が哲学・思想という、一般的には社会性や即時的な有益性を示しづらい研究領域であることから、必然的に発表内容は耳目を引く・分かり易いものを選定した。つまり、構成から細かな考察を省き、事例を優先すると共に、研究内容よりも研究手法を前景化させることで、大学院で学んだことと企業に属した際に役立つスキルとを積極的に架橋しようという目論見を図った。それが功を成したのか、それともただ私の研究領域の物珍しさからか、多くの方に楽しんでいただいたという手応えを感じることができた。プレゼンテーションは2時間を4つのタームに分け、それぞれ30分程度の内容を続けて行う形式で行われたが、私の発表ブースは随時満席+α——と言っても各ブースに設置されている椅子は6脚しかないのだが——と、ご好評頂いた。プロジェクタの使用に当たり、過度のタコ足配線による電源供給の不備が起こった際も、予め用意していたレジュメ資料をご参照いただくことで迅速な対応ができたかと思う。企業としては、あるいはこうした状況、不測の事態に如何に対応できるかが研究内容よりも重視される事柄であるかも知れない。これまでIFERIでの研究発表を含め、数多く発表の場を頂いていることもあり、その場に応じて適切に対応する能力は確実に培われていると実感できるところである。

学生側のプレゼンテーション終了後、今度はブースにいる学生に対し、個々の企業が自社を売り込む時間が取られる。是非ともお話を伺いたいと狙いを付けていた企業から、い

の一番にお話を頂くことができたこともあり、自身がセミナーに当たって掲げていた目標は達成されたように思う。その後も、実際的な技術開発を売りにしている工学分野とは比較する術もないが、様々な企業からお話を賜ることが出来た。この点に関し、苦言を呈するわけではないが、やはり文系院生に対する企業の扱いというのは難しいものだと実感するところ大であった。理系の、とりわけ実学・応用分野であれば企業側も採用後のヴィジョンというのか、「あなたの研究／能力はここで活かします」と売り込むことが容易に可能であろう。しかし、文系院生の場合とはとりもなおさず一般職／総合職採用となるため、そして研究内容が企業活動と必ずしも密接するわけではないために、企業側が売り込みに苦心する様子が理解される。私が「企業に対して、一体何をアピールすればよいのか？」と悩み悩んだのと同様に、企業も「学生に対して、一体何をアピールすればよいのか？」を手探りしつつ、あるいは学部新卒採用との差異を見出すことの出来ないままに交流が行われた観もあったように思われる。「逆求人セミナー」に文系院生が参加するようになったことを契機に、この容易に解消されざる問題を再考することは有意義であるように感じた。

大学院に入り、ゼミで発表する／学会で発表する／大学学部生向けに講義する／市民向けセミナーで講演するなどの経験を積み重ねていただいたが、今回の「逆求人セミナー」で採用企業向けにPRするという事は、また異なった経験であると深く実感する次第である。必ずしも学的な前提や興味を共有し得ない中、自身の研究が如何に有用かと言うよりもむしろ、自身が研究を通じて何を訴えたいか、あるいは何を培ってきたかをぶつけることが求められたのは新鮮な経験であった。聞き手の立場を深く斟酌しながら行われる自己提示を求められるに付け、セミナーという1つの対話形式に内在する相互の思惑を感じ取れたように思う。このセミナーが即座に就職へと繋がるものではないとしても、非常に得難い経験を積み重ねていただいたと感じている。就職課の皆様を始めとして、セミナーでお世話になった方々に対し、この場を借りて御礼申し上げたい。

以下 2009 年 10 月 15 日 (木) に行われた逆求人セミナーにおける発表者の発表内容及び企業の反応とその後に行われた企業との交流会についてまとめたものである。今回企業の人事担当の方々に対するプレゼンテーションということで、普段の発表とは異なる研究発表を行った。その中心は昨年度筑波大学に提出した拙稿である修士論文の作成過程についてである。この修士論文の三分の二を占める仏教文献のテキスト作成を具体例として、現物のサンスクリット写本やチベット語訳・漢訳の文献を持参し、それらを実際に見ていただくことで、普段どのような研究をしているのかということを知ってもらうことを目的とした。

今回の逆求人セミナーに関しては、理系の大学院生採用をメインにしている側面もあり、どの程度企業の人々が文系学生に対して興味を示してくださるか不安に思うところもあったが、30 分×4 タームの研究発表はあっという間に過ぎてしまった印象があった。しかし発表を重ねるにつれ、上手くいくというよりは、ろれつが回らなくなる箇所があり、長時間にわたる発表については考えさせられる側面もあった。

企業側の反応としては、予想していた以上のものであったといえる。基本的には、どの人事担当の方も興味を持って聞いてくださり、文字資料の多い発表であったにも関わらず、熱心に耳を傾けてくださった雰囲気であった。文字資料だけではと思い、今回は以前国立博物館で行われたスリランカ展と現在上野で行われているチベット展の図録に掲載されている貝葉写本などの説明も行ったことで、より関心を寄せていただくことが出来たように思う。もともとパワーポイント形式の発表には不慣れで、未だにその機能を使いこなせていないところがあるが、そのマイナス面を現物で補うことができたように思う。さらに無味乾燥なスライドだけではなく、カラーの現在知られる宗教的な文物を実際に見ていただいたことは、30 分間という長時間のプレゼンテーションにおいて退屈な時間を作らずにまとめあげることができた勝因でもあると考えている。

第二部に移り、企業との交流の時間においては多少時間をもてあます場面もあったが、熱心に研究発表を聞いてくださった人々及び、事前に希望を伝えていた企業の方々にブースを訪問していただいた。普段人に評価される研究をしているわけではないので、こうした場で声をかけていただけること自体が非常に喜びであった。又研究発表に関する質問から、これからいかに社会に貢献していくかといった答えに窮する質問まで、これまで考えてこなかった自分自身と社会との関わりを改めて考えさせられる時間であった。

この先いかなる道を選択することになろうとも、一般企業の方々を相手に研究発表をすることができた機会と経験は私自身のこれからの研究その他に生かされることと思う。最後に、このような機会を与えてくださった池田潤先生を始めとする先生方や準備をしてくださった大学職員の方々に感謝の意を記したい。

逆求人セミナーの最も特筆すべき点は、現在の自分に何が足りないのかが明確になることである。言い換えるならば、自分自身の研究の「市場価値」が露になることを意味する。それは非常に残酷な評価軸ではあるが、学術的価値のみで研究を進めて行くことが困難な昨今、一般社会との繋がりという視点を持ちつつ研究を行うことが要求されていることも事実。本セミナーへの参加は、そうした重要性を再確認することができた経験であった。

セミナーは研究内容の発表と、企業との交流からなる二部構成となっていた。

第一部の発表は、30 分間の口頭発表×連続 4 セット、2 時間近くしゃべり続けるというもので、もちろん今までに経験したことが無く、想像以上に（身体的に）タフであった。各発表者ブース前に 12 席用意されていたので、都合 50 名弱のオーディエンスに発表したことになる。発表形式は、スライドによる発表を選択した。これには IFERI でのプレゼン経験を存分に生かすことができた。つまり、「専門外のひとに理解してもらうこと」を重視した伝え方である。特に、企業側が興味を持ちやすいようなタイトル、ビジュアル、及びプレゼンテーションを心掛けた。

第二部の企業側との交流セッションでは、発表内容に興味をもった企業側から院生に接触する機会が設けられた。前述の心がけの成果かどうかは定かではないが、10 社以上の企業の採用担当者と話す機会に恵まれた。研究内容ゆえ、IT 系企業から多く声がかかった。D1 という立場での発表故、企業側の認識（来年度採用）とのズレがあったことは確かであるが、企業側の担当者とのディスカッションでは、単に採用の話だけではなく研究内容に直結するような有益な情報交換をすることができた。

本セミナーのユニークな点は、文字通り、「逆」求人であることだ。院生主導で、自分と企業のマッチングを評価できることが非常に画期的である。今回の短い企業交流の間でも、（不遜ではあるが）魅力的な企業と、そうでない企業というのは明らかであった。こうした分析的視点は、がむしゃらな就職活動をしていた当時には得られなかった視点であり、翻ってどのような自己アピールが求められているのかを考えさせられる体験であった。

また、企業の採用担当者からの反応に多くの発見と励ましを得ることが出来た。発表内容への質問やコメントと併せて、発表形式に対するお褒めの言葉を多く頂くことが出来た。自分が注力したポイントが伝わっていたことへの安堵と、学術世界外にある企業側からの率直な賛辞が研究への自信に繋がることを実感した。

一方で、問題点もいくつか散見された。個人的な印象ではあるが、ビジュアルによる発表や口頭発表が不得意な院生には不利であるように見受けられた。多くの対外発表機会がある IFERI 生とは対照的に、多くの院生にとって専門外の人間に発表することは稀であろう。そうしたトレーニングを行うこと無く本セミナーに参加した結果、聴衆を集めることが出来ず自信を喪失するという負の連鎖があってはならないと感じた。また、企業との交

流時間が物足りないと感じた。研究内容の発表よりも得るものが大きかったため、今後の改善を期待したい。

逆求人セミナーは、こと研究室にこもり気味になる院生にとって、自己の学際的研究の価値を測るには絶好の機会だと感じた。同時に一般企業とのマッチングという貴重な機会でもある。今回から文系学生にも門戸が開かれた同セミナーへの積極的な参加を、IFERI 生には是非ともお勧めしたい。

今回行われた「逆求人セミナー」は、10月15日に大学会館で10時から17時まで行われた。院生の研究発表は午前のセッションが10時から12時、午後のセッションが13時から15時まで。質疑応答などを含めた30分の発表時間が4回、という構成だった。その後、企業側がアプローチをかけて各ブースの院生に企業の活動内容の紹介や質問などを受け付けたり院生に質問したりする時間が15時から17時まで取られた。

結果としては、聴講してくれた人事担当は20人から30人程度。個別のブース訪問では、5人の企業の人事担当が私のブースに来て企業の活動内容を説明してくれた。当初はマスメディアか自分の研究内容にかかわる開発コンサルタントにブースを訪れてほしかったのだが、ブースを訪問してくれた企業の内容としては、まずメーカーが多く、次に生命保険会社やIT関連が続いた。

私の発表は午前中のセッションであった。パワーポイントを設定したほかは、ウズベキスタンで入手したアラル海の最新の状況を撮った写真をカラーでA3程度に引き伸ばしたものをポスターのように張り出して、視覚的インパクトを与えることを狙った。発表内容としては、これまでIFERIの各特講で発表した内容に肉付けを行ったもので、結果としていかに自分の研究が進んでいないかを思い知らされた格好となった。

企業の人事担当の反応だが、4回の発表の最初は、私のブースに割り当てられていた6席のうち5席が埋まり、ほかに椅子の後ろのあたりにも聞いている人事担当の方がおられ、まずまずの滑り出しかと思われた。しかし、中盤頃は4席埋まるほかはあまり人が寄り付かなくなり、最後にかろうじてややにぎわいを見せた程度であった。

反省してみるに、やはりまだまだ私の発表が、いわば聴講者に対して不親切な面があったのではないか、と思われる。合間のわずかな時間に他の発表者のプレゼンテーションを垣間見てみたが、パワーポイントの内容にしろ、語り口にしろ、聴衆への誠意がにじみ出ていたように思われる。私の発表の、自分の研究内容をあらゆる面で自分の基準によりかかっているありようが浮き彫りになった形であった。普段IFERIで他専攻の院生と触れ合って、研究内容を披露しあっていただけに、このことはややショックであった。自らの研究が国際協力という分野にかかわり、それだけで研究の意義があるのだという、あるいは、そのため、社会や民間企業に対して自分の研究はよいようにとらえられるだろうという、心のどこかにあったみずからの思いあがりのしっぺ返しを食らったのだと、今はそうとらえている。

普段の研究発表と違い、今回は企業の人事担当に発表をするということで、普段とは違う価値基準で自分の発表を評価されるのは新鮮であった。たとえば私が夏に現地調査を行い、また12月から1年間ウズベキスタンに留学することに関しては、建設会社の方から「フィールドワークを行う学生はバイタリティがあつていい」という評価をいただき、また研究内容に関しては、「社会全体に役立つ仕事に興味があるのか」と、生命保険会社の方

から質問を受けた。

視点を社会一般に向ければ当たり前といえば当たり前なのだが、自分の研究内容に直結するような職種に絞ろうとすると、極めて選択肢が限られる。しかし大学院に進むと、自分の研究内容にこだわりが増して、やや視野が狭くなってしまうことを思い知らされる結果となった。ケータイコンテンツを制作しているある企業の人事部によると、数学系の大学院を修了してポスドクをした後入社した社員もいるという。現実的な選択肢ということを考えればいろいろではあるが、自分の研究内容への違った視野を獲得できたような気がした。一般社会（このような表現が適切かどうかは疑問だが）は、やはり広がった、というのが、今回のセミナーでの感想であった。

また、会場全体を見回して、やはり文系院生の就職は難しそうである、という印象を受けた。企業のブース訪問でも、理系の院生のブースへの訪問数はずば抜けていた。ただ、私の隣にいた、植物系の博士課程の院生は、私と同程度の訪問数であったが。

最後に、やや繰り返しになるが、より個人的な感想としては、私の研究内容は社会貢献度の高い内容であると自負していただけない、社会の企業の方々から思ったほどの反応が得られなかった今回の結果には、大いに不満足であった。自分の研究対象への仁義や誠意を尽くすためにも、研究の深化と合わせて、今回の結果を踏まえて発表内容の向上を図りたい。